建築と写真に関するブックリスト

文／選：加藤千佳

古くから建築は画像とともに設計・発表されてきた。近代以降、とくに発表の際に大きな役割を担うようになったのが写真である。さらに現代では建築や都市を対象にしたアートとしての写真も多い。深い関係にある建築と写真について、その旧来の議論を追うと、本特集で紹介されるレンダリング・ポルノや生成AI、CGといった新しい建築画像とも共通するような話題（1–3）がみうけられた。建築と写真について考えることが、本特集のヒントになるのではないだろうか。

凡例：

頻出の雑誌は
雑誌名略（以下）と発行年月略で示す
AC　アサヒカメラ
BT　美術手帖
KB　建築文化
KZ　建築雑誌
SK　新建築
例、SK0001 ＝『新建築』2000.1

『10＋1』は
10＋1（号数）発行年略
10＋1 websiteは
10＋1 web、発行年月
で示す

その他の雑誌は以下など
『雑誌名』発行年月
『雑誌名』巻数、発行年
『雑誌名』（号数）発行年

くり返し登場する文献は
記号a–iをつけ、
2度目以降は記号で示す

くり返し登場する著者名は
2度目以降は姓のみなどで示す

訳者名は省略する

他の書籍に所収されている場合は
（　）内に所収先を示す

本記事中は会誌HPで拡大して閲覧可能
http://jabs.aij.or.jp/

加藤千佳 Chika Kato
会誌編集委員会委員／東京工業大学建築学系博士課程／1994年生まれ。2022年東京大学環境・社会理工学院建築学系修士課程修了。建築意匠論、とくに建築写真について研究

これまでの議論の場

建築写真や都市写真の特集：

- AC7510（建築空間を考える）
- KZ7910（建築写真とは何か）〔a〕
- 『建築写真・表現と技法』玄光社、1980〔b〕
- SD8608（写真――映像の建築と都市）〔c〕
- 10＋1（23）01（建築写真）〔d〕
- 『すまいろん』（77）2006（住宅写真）
- 『建築写真』エクスナレッジ、2006〔e〕
- 『日経アーキテクチュア』2006.12
- 『a＋u』2009.1（写真／発想の源）
- KZ1007（建築写真小史）〔f〕
- 『建築写真2010』10＋1web、2010.7〔g〕
- 『IMA』2、アマナ、2012（都市へ）
- 『追悼・大橋富夫さん』『住宅建築』2018.6
- 『写真』1、ふげん社、2022（東京）
- 『日事連』2023.2

展覧会・イベントのカタログ：

- ターナー, J『抽象への注釈』アクシス、1986
- 『遠・近　ベッヒャーの地平』川崎市民ミュージアム、1996
- 『サイト』東京国立近代美術館、2002
- 『建築と写真の現在』TNプローブ、2007
- 『建築の記憶』東京都庭園美術館、2008〔h〕
- 「セッション3　写真と建築」『写真の誘惑』国立国際美術館、2012
- 『大辻清司フォトアーカイブ――写真家と同時代芸術の軌跡　1940–1980』武蔵野美術大学美術館・図書館、2012
- 国立新美術館他編『アンドレアス・グルスキー』読売新聞東京本社、2013
- 『建築×写真』Millegraph、2018
- 『石元泰博　生誕100年』平凡社、2020
- 『風景論以後』東京都写真美術館、2023
- 『即興ホンマタカシ』東京都写真美術館、2023

1　建築写真・都市写真の虚構性・仮象性

写真化することを、被写体である建築や現実世界からの削除・抽出・選択、つまり創作ととらえるものに加え、写真と被写体を部分・断片／全体、抽象／具体、平面／立体と対立させるものや、両者が独自に意味や物語をもつと主張するもの、写真家が自律的にもつ、または他律的に得たスタイルの存在にふれるもの、そもそも人の見る被写体が虚構・仮象であることに留意するものなどがみられた。

- 多木浩二「牙のない若ものたち」、SD7106
〔…〕写真もまたきわめて意味論的世界のなかに属する〔…〕裸の眼とか肉体の直接性〔…〕がこの都市のなかに生きつづこまで可能かは疑わしい。
- 中平卓馬「都市・風景」『朝日ジャーナル』1972.9.29（『都市風景図鑑』月曜社、2011）
〔…〕物たちを〔…〕意識に従属〔…〕と考えて生きている。だが〔…〕突如名もない物体に〔…〕
- 多木「何が変わったか――高梨豊の「街」シリーズについて」、AC7701
写真家のつくりだしているのは、いわばイメージのスタイルである。〔…〕スタイルはまず個人的なものだ。しかし同時に社会的なものである〔…〕
- 増田彰久「建築を伝える」、a
〔…〕虚構化の中に〔…〕写真のリアリティー〔…〕私たちが建築の現実を体験するときは〔…〕ある空間に身をおいたり、ふれてみたり、いろいろ〔…〕
- 吉阪隆正「建築と写真と、各々それぞれの道を」、a
また、建築はいつも全体としてそこに存在するが、写真はその部分を切りとって〔…〕写し手の解釈や印象や評価を加えたものなのだ。かえって実物より素晴しい姿を浮き彫りにしてくれる場合もある。
- 植田実「編集者の立場から」、a
〔…〕建築家側からの写真に対する注文〔…〕を〔…〕定着させるのは〔…〕写真家が備えているスタイルであり、建築家や編集者が満足するのはそのスタイルの十全の発揮であって空間の獲得では、実はない。
- 長谷川堯「建築写真の現状と将来」、a
- 谷川正己「建築写真に期待するもの」、a
- 山田脩二「発展途上――60年代初めの街　渋谷」『写楽』1984.11
〔…〕こっちがかなりの質感を持っていかないと、どこへいっても結果的に都市の写真は一緒〔…〕僕自身、もう一回日本の持っている肌ざわりというか、質感を持っていかないと、所詮、たまたま上海を撮ったというだけの写真になる〔…〕土管とか瓦を通して、自分の質感を確かめなければいけない〔…〕
- 平木収「風景を起こす写真家」、c
〔…〕写真家〔…〕は〔…〕世界から風景を起き上がらせたり、また風景の意味性を消去して〔…〕特別な物だけを抽出〔…〕それは建築家が〔…〕空間の意味や意義を操作するのと多少似かよった〔…〕
- 磯崎新「TOKYO IS PHOTOGRAPHY」篠山紀信『Tokyo未来世紀』小学館、1992
〔…〕写真は虚構を組み立て直す装置〔…〕と同時に東京という町はどんどん希薄となり、虚構として〔…〕写真の中にしか「東京」は存在できない〔…〕
- 安斎重男、ターナー「光と影の形象」、10＋1（2）94
〔…〕私は世界をコンポジションとフォルムとして〔…〕平面〔…〕に興味がある〔…〕僕の場合は〔…〕物や空間のまったく新しい関係を発見し〔…〕
〔…〕建築〔…〕は非常に抽象的な行為なのですが、その抽象的なプロセスをもっと進めている〔…〕建築写真とは〔…〕断片で〔…〕コンテクストからひいては関係からも抜き出す〔…〕その段階で新たな意味、解釈を付け加えると同時にまた相反するその建築のエッセンスをも抜き出そうと〔…〕
- 多木「エヴァンズの方法」エヴァンズ, W他『アメリカ』リブロポート、1994（『写真論集成』岩波書店、2003〔i〕）
ある室内を写真で知覚すること〔…〕事物に対する直接の知覚とは完全には分離できないし〔…〕実際的な意味から逃れることはできない。〔…〕写真に魅力を感じ〔…〕るとは〔…〕細部や、それらの事物が織りなす関係に現実の空間のなかでは感じない強い想像力を〔…〕
- コロミーナ, B『マスメディアとしての近代建築』鹿島出版会、1996
〔…〕写真とレイアウトがページの空間に、もう一つの建築を築き上げよう。
- 田中純「〈光の皮膚〉の肌理」、10＋1（6）96
〔…〕起こらなかった出来事の痕跡〔…〕として、写真のうちに写しとられてしまった何ものか〔…〕写真〔…〕を通じて都市はアナクロニー化される。
- 小林康夫、鈴木了二、松浦寿夫「風景の思考」、KB0011
〔…〕無人の場合には、建築が人間的なスケールに変換されない形で提示される。〔…〕「世界モデル」がスケールを奪われた建築だとすれば〔…〕
- ホンマタカシ、貝島桃代「郊外の発見」、KZ0104
建築というのは1個だけをつくっているのではなくて〔…〕総合的な空間の問題だから、そこでいろいろなまなざしが交錯できる〔…〕ずれのなかで〔…〕
- 福屋粧子「建築写真を拡張する三人の写真家」、10＋1（38）05
〔…〕空間の広がりを知るために、人は、右目と左目のそれぞれの映像について〔…〕ひとつの理解をつくりだす。〔…〕カメラの視点は〔…〕片目視である。
- 青木淳「写真に撮りにくい建築になってしまうのは」、h
写真は〔…〕人間の視点で撮られる。だから、写真は本来的には具体に向かいあっている。しかし、建築写真は〔…〕抽象として建築を写そうと努めてきた。建築写真は、眼の前で繰り広げられている、かたちの世界、色の世界、テクスチュアの世界、光と影の世界が重なり合う情景ではなく、その裏側に存在しているはずの本質をなんとかえぐりだそうと〔…〕
- 村井修、山岸剛「「建築写真」を開く」、f
〔…〕形成されてきた〔…〕「美学」でもって僕は、建築を「象徴」として写真に定着している〔…〕
- 戸田穣「建築のなかの／建築のような」、g
一枚の写真に内在する、演出・トリミング・プリント・エディションの問題。タイトル・キャプション・レイアウトによって呼び込まれる外在的なコンテクストあるいは意味。被写体・撮影者の個人的な物語。〔…〕建築写真のなかの人物〔…〕によって、ある物語が建築の中に作動する。
- 篠山、松井茂「磯崎さんは事件を起こしたかったのかもしれないね、僕に写真を撮らせて（笑）」『現代思想』2020.3臨時増刊
見る対象が、建築上の面白さっていうよりも、ここに、こういうものがある有り様のなんか不思議なねぇ……。例えば〔…〕宇宙船が村に降りて来ちゃった、っていうような感じ……。それを村人が見たらこういうふうに見えるんじゃないか？って〔…〕

2　建築・都市を共に「つくりあげる」こと――実と虚が交わる、あるいは虚と虚が重なる場としての建築写真

実在の建築に対して建築家と写真家が共に思い描いた建築イメージを表現した写真や、建築家のイメージにもとづく実空間に対して写真家が抱いたイメージを表象した写真などがある。さらに編集者やその建築の住み手、観者のイメージも重なり得る。

建築の専門家と写真家が協働した写真集等：

- 二川幸夫、伊藤ていじ『日本の民家』美術出版社、1957–1959
- グロピウス, W、丹下健三、石元泰博『桂――日本建築における伝統と創造』造型社、1960
- 大辻清司「住まいができたら」、AC7610
- 『磯崎新＋篠山紀信建築行脚』六耀社、1980–1992
- 石元、磯崎『桂離宮』岩波書店、1983
- ホンマ、貝島「建築・環境・写真」『SWITCH』1999.11–2003.11
- 畠山直哉、伊東豊雄『UNDER CONSTRUCTION』建築資料研究社、2001
- 青木、鈴木理策他『青木淳　Jun Aoki Complete Works 2』INAX出版、2006
- 『内藤廣＋石元泰博　空間との対話』ADP、2013
- 西沢立衛、鈴木理他『私の秘密の庭』トゥルーリング、2019

写真と共に建築の専門家による
テキストがよめる写真集：

- 東松照明『日本』写研、1967（磯崎、多木他）
- 桑原甲子雄『東京昭和十一年』晶文社、1974（多木「孤独な人間の後ろ姿」他）
- 篠山『家』潮出版社、1975（多木「生きられた家」）
- 山田『日本村　1966–1979』三省堂、1979（磯崎「いまさら広場なんて」、多木「出来事のかたち」他）
- 宮本隆司『建築の黙示録』平凡社、1988（磯崎「廃墟論」）
- 篠山『Tokyo未来世紀』小学館、1992（三宅理一「悪魔の祭司」、磯崎前掲論考他）
- エヴァンズ他『アメリカ――大恐慌時代の作品』リブロポート、1994（多木前掲論考他）
- 高梨豊『地名論』毎日コミュニケーションズ、2000（鈴木博之「地名論の世界」）
- 金村修『Spider's Strategy』オシリス、2001（磯崎「蜘蛛の戦略、あるいは記法の廃墟に」）

建築家と写真家や住み手、編集者、観者
との関係に言及する文献：

- 篠原一男「住宅設計の主体性」『建築』1964.4（『住宅論』鹿島出版会、1970）
建築家は思うままに演出し、カメラマンはそこからさらに自分の空間を引きだし、そして、雑誌のエディターは最後の仕上げをして世に送りだせばよい。
- 磯崎、中平、李禹煥「群馬県立近代美術館について」『近代建築』1975.1
〔…〕人のつくったものを自分の消去法で撮りたいんですよ〔…〕これは磯崎さんがつくった建築なんだと、どうあれ、他のものは映りっこないんだと〔…〕ただ出来あがったものが〔…〕自分でしかない〔…〕消去しようとしても〔…〕しきれない〔…〕
- 菊地大麓「私の創作活動における建築写真」、a
- 吉阪、前掲「建築と写真と、各々〔…〕」
- 谷川、前掲「建築写真に期待するもの」
〔…〕建築家の創作意図に迫り得ていない写真や、写真家自身の創造行為の盛り込まれていない写真は〔…〕適正を欠く〔…〕同時に〔…〕建築作品の創作意図のきわめて稀薄なものは、いかに著名な写真家の腕によってでも、真には成り得ない〔…〕
- 「建築家 vs. 写真家」、b
- 磯崎「桂――その両義的な空間」、前掲『桂離宮』（『見立ての手法』鹿島出版会、1990）
〔…〕当時、丹下健三と石元泰博が共有していた美意識〔…〕近代主義的デザインの独自の指向性があった。このたびの再撮影は〔…〕両義的で、ときにはキッチュにみえるものまで含まれている。
- ロブ=グリエ, A、三宅「建築＋写真＋映画」、SD8407
〔…〕3つの想像が関わってくる〔…〕建築家の想像、写真家の想像、それに写真を見る人の想像です。
- 鈴木了「永久相互反応装置」、c
〔…〕かれは写真上の対象を支配し所有することを断念しているのだが〔…〕写真上では所有者＝作家もまた対象＝作品を支配し所有できないことも同時に明らかにする。〔…〕所有関係が解除されたときはじめて本来の相互的対話が成立する。
- 植田「《都市住宅》で出会った写真家たち」、c
〔…〕住み手が加わって〔…〕小ぎれいな住宅写真を撮られることを嫌った赤塚さんが、映画のセットのように念入りに演出した生活の姿だったのか、それともあるがままの日常だったのか〔…〕
- 安斎、鈴木了「写真家と建築家の対話」、SD9205
〔…〕単なるデータであれば、撮った順番に並べればいいけど〔…〕僕のやっているのは、鈴木了二の建築を語るための単語を作っているみたいなもので、どの単語とどの単語を組み合わせれば、僕なりのリアクションを証明できるかという作業なんだよ。
- 石元、藤森照信「戦後モダニズム建築の軌跡・丹下健三とその時代14」、SK9905
- 大島哲蔵「建築写真のヴァーチュアリティ」、d
〔…〕ルイジ・ギーリ〔…〕ロッシの設計の質――世界劇場へのスケール変換――を暗黙のうちに表している。両者の表現は類推的な都市を構築する共通項について、ぴったりと寄り添っている。
〔…〕ルフが収集した〔…〕建築家と（その作品を撮影する）写真家というような間柄を逸脱して、建築的コミュニケーションの本質にメスを入れる〔…〕
- 青木、鈴木理「建築と写真のあいだに」10＋1 web、2006.8
- 伊藤俊治「20世紀建築写真史　空間の経験と創出」、e
〔…〕平面と立体という区別やイメージと現実といった差異が失効し、建築家と写真家が共通の基盤上に新しい建築写真〔…〕を現実に具体化〔…〕
- 「大辻清司×篠原一男」『建築と日常』（1）2010
- 鈴木了、西沢、山岸「「建築写真」以後」、f
〔…〕現代建築〔…〕が、「新建築」の写真にちょっと近づいているというか、両者はパラレル〔…〕
- 新津保建秀他「建築の経験／写真の経験」、g
〔…〕誰の視点に立った空間の記述なのか〔…〕
- 「磯崎新×篠山紀信　写真力と紀信力」、AC1212
- 磯崎、日埜直彦「数々の写真家たちとの関わり」『磯崎新インタヴューズ』LIXIL出版、2014
- 増田玲、鷲田めるろ、中山英之「これからの建築写真の居どころ」、KZ1709
〔…〕ルフ〔…〕そこには建築と写真の関係性という問題設定があって、写真家自らが空間を解釈して撮影するということだけではなくなってきている。
つまり、建築は〔…〕見る人によってつくられる、建築を体験する人の数だけ建築はある〔…〕
- 磯崎、ホンマ「時代を写す建築写真」『IMA』29、2019
〔…〕中平は実際にあるモノをイリュージョンとして撮っています。僕は、建築はモノとして存在するけれど、空間とはイリュージョンだと考えていた。
- 篠山他、前掲「磯崎さんは事件を〔…〕」
- 西沢、石上純也、ホンマ「ドキュメンタリー映画『建築と時間と妹島和世』をめぐって」IMA ONLINE、2020.11
〔…〕僕が90年代半ばに世に出たときに、「明るい写真」だってすごく批判されました。〔…〕妹島さんも「軽い建築」とか「透明な建築」といわれて出てきたから、ちょうどその質感がマッチしたんですよね。

3　建築性・都市性や建築・都市への視点を見出すこと――事後的に撮られるものではない建築写真

建築写真といえば、施工後、事後的に撮影されるのが一般的である。しかし建築・都市を写した写真を観察することによって、または写真を撮る行為によって、今後設計されるかもしれない建築のイメージを得うる。

- 多木「「意味」の空間」、SK7101（『建築家・篠原一男――幾何学的想像力』青土社、2007）
〔…〕視覚と空間のズレ〔…〕篠原一男の住宅の写真をとるという行為が、それとはうらはらなことを私に明らかにしていた〔…〕この空間の成立にとって、視覚的なものはどれほど意味があるのかという問いであったし〔…〕篠原のなかでの変化のひとつの意味を把握できるように感じたのである。
- 三木卓「静物としての現実――稲垣功一写真集《Maybe, maybe》」、SD7109
〔…〕ディテールを消去することで、一つの形をつくり出す〔…〕あつかっているものは、或る時間・空間の上に成立している都市とその郊外〔…〕であるが〔…〕普遍の時間の方へとにじみでようと〔…〕自分の決定した方法〔…〕の枠内でそれに適した素材を持ちこんで〔…〕熱い意味を途中でやや押える結果にもなっていはしないか。方法が意味を持つのは〔…〕つまり、方法の必然ということを〔…〕問い返す作業を続けていなければならない〔…〕
- 渡辺武信「神話の残滓としての都市像」、SD7204
石元泰博の画面にあるのは空間ではなく〔…〕物体と人間とが〔…〕同化しているこの光景ほど〔…〕都市文明の様相を明確に集約しているものは他にない。〔…〕東松照明〔…〕文明によって〔…〕パッケージされた人工的環境の〔…〕敵対性を的確に暗示しながらも〔…〕空間のひろがりを感じさせることによって、都市的な豊かさが、ある避けられぬ快適さと親しさをつくりだしてしまうことをも表現〔…〕
- 磯崎「家の記号学」、SK7602
篠山紀信の“家”は意図的なシンボリズムがすべて排除され〔…〕画面のなかでの細部間のハイアラキーが消えると同時に、文化的社会的に格や分類の異なる物体間のハイアラキーも同時に消え〔…〕日本のあらゆる地方や階層や種類の家々が、このように平準化した光景となって並列されると、奇妙なアクチュアリティをもって再編されはじめるよう〔…〕
- 多木、前掲「何が変わったか」
〔…〕それを構成している物の多様な読みに結びつける〔…〕ひとつひとつが、都市とか街とかいう観念の宇宙を象徴するのではなく〔…〕ある完結しない、具体的な世界、あるいは裸の具体性〔…〕
- 多木「家と都市を横切る肉体――篠山紀信の「家」「パリ」について」、AC7702
見えないものをさぐることは〔…〕意味に先行されている。かれは〔…〕だれの眼にも自明な、視覚的イメージにとどまる。したがって個々の物は、日常的な名まえをもち、柱であり、床であり、街角〔…〕〔…〕家と人間の生きられた関係に生じる「微小な次元」に「民家」を断片化するのであり、生きられた環境という断片に都市を切りわけるのである。
- 多木「出来事のかたち――山田脩二の「日本村」について」、AC7708
〔…〕山田さんは都市が日常的には見えなくなってしまった姿をあらわす瞬間をとらえている。
- 植田「都市写真集を買うとき――《高梨豊写真集――町》によせて」、SD7804
〔…〕〈新しさ〉を〔…〕喚起しているのだ。〔…〕〈もの〉は全て、新しいからそこに入ってきたのである。それがわが東京の町の出来方だ。
- 桑原「悪魔のエロチシズム――石内都展「アパート・APARTMENT」」、BT7809
- 鈴木志郎康「山田脩二　人間の息づく空間を写しとる」、AC8007
〔…〕撮影者の存在は〔…〕消えて、むしろその空間を成したものの存在の方が強く〔…〕『日本村』〔…〕では、生きてゆく上で自然に形成された個々の場所の空間が浮かび〔…〕日本人の空間意識というものが、はっきりと見られる〔…〕
- 磯崎、多木、篠山「建築家と写真家の触れ合いが……。」、b
- 山田「まずは登ろうノッポビル」、BT8111
まず観察すること〔…〕思っているようには、現実の都市、建物群は姿を見せてはくれないのです。
- 鈴木了「都市の質感――森山大道『光と影』から」『カメラ毎日』1983.5（『非建築的考察』筑摩書房、1988）
この「間接的」姿勢が〔…〕事物の中に入ることを可能にするかのよう〔…〕その距離は、「形」という秩序から物が解放される距離でもあるからだ。
〔…〕経験としての都市の喪失が、新しいテクスチュアとなってはっきりと写っている。
- 平木、前掲「風景を起こす写真家」
築地仁〔…〕身体の実寸を消し〔…〕大規模な外壁を電子顕微鏡で〔…〕覗き込んだときに見える文様のように見てたち〔…〕ミクロなスケールの大風景を描き出してみたり〔…〕
- 坂茂「非・建築写真家　ジュディス・ターナー」、c
〔…〕個々の形態は総てそれぞれの建築的な機能〔…〕を、より鮮烈に引き出している。
- 飯島洋一「現実と非現実のはざまに漂う原発の風景」、AC9411
- 多木「「夢」の地図帖――アジェの旅するパリ」、10＋1（1）94（i）
- 多木、前掲「エヴァンズの方法」
〔…〕抽象的な想像力をかきたて、かつ社会的な意味を発見させる形式を生むコードを工夫〔…〕
〔…〕記号と化した都市の経験を象徴していた。
- 飯沢耕太郎『東京写真』INAX、1995
- 田中、前掲「〈光の皮膚〉の肌理」
- 大島「写真者のテクスト」、10＋1（8）97
- 福屋「フリーズフレームス」、10＋1（14）98
〔…〕住居とは〔…〕倉庫に過ぎない〔…〕
〔…〕遠くの人型は、ここまでが連続した空間であると宣言するための証拠〔…〕しかし小さな人影の活躍も長くは続かない。〔…〕空間を連続したものとしてとらえることができるようになったためだ。
- 大島「写真が発見する風景」、KB0011
要するにエレメントの複合と対立がもの自体の世界を洗い出し、観者はそれを産出した時間の残像と対決する〔…〕ストルスの都市はリアルとアンリアルが交差する「類推的都市」というる。
ウォールの提示する郊外は開発の手が入ることで出現したか、あるいは開発に取り残された空地に現れた、非現実的な現実を特徴づけている〔…〕
- 倉石信乃「Ruin / Desolation Row」、d
ポスト・ベッヒャーの作家〔…〕無限の新しい反復のなかに閉じ込められる。〔…〕平準化した公的空間の幻惑的・空想的かつ曖昧な肯定とも結びつく。
〔…〕彼女の「抽象性」は〔…〕ロウの言う「リテラルな透明性」〔…〕を想起させる〔…〕「場が空間に変容する契機」を見出そうとするランプリの作品〔…〕
- 大島、前掲「建築写真のヴァーチュアリティ」
- 飯沢「網目状の……――建築と都市への視点／森山大道と荒木経惟」、d
彼らの写真に写り込んでいる建築を見直すことで、都市の解体と生成の現場を逆照射してみたい。
〔…〕街路も建築物も〔…〕表層的なパターン、連続的に生成変化していく「網目状」のつらなり〔…〕
- 多木「文明のタイポロジー――ベッヒャー夫妻『溶鉱炉』『給水塔』」、i
〔…〕差異を通じて環境的技術のタイプ／トークン関係を発見させながら、同時にけっして同一ではない個別の差異を文化的意味として示している〔…〕
- 長谷川祐子「新たなるフレキシビリティ」SANAA『妹島和世＋西沢立衛／SANAA　金沢21世紀美術館』金沢21世紀美術館、2005
ルイザ・ランプリとウォルター・ニーダマイヤーはSANAAの建築の4次元的曖昧さと、時間に応じて異なった意味を帯びていく空間、〔…〕光によって表される「時間性」に対して反応している。ホンマタカシは、平板な状況を受け入れる偏見のない視線という意味で、「浸透性」に反応している〔…〕
- 福屋、前掲「建築写真を拡張する〔…〕」
- 清水穣「歪んだ四角」、e
ティルマンスの写真の〔…〕ずれて多重化し、歪んだフレームが、複数の外部と内部を接続しつつ置換する、その境界域に、写真の空間性が位置し〔…〕
- 多木、前掲『建築家・篠原一男』
篠原さんの作品の写真を撮りながら、私は視覚的なものだけでは語れない空間を感じていたのである。
- 鈴木了「物質写真序説」『d/SIGN』（16）、2008（『寝そべる建築』みすず書房、2014）
- 小川重雄他「錯綜する「建築写真」」、f
- 鈴木、西沢、山岸、前掲「「建築写真」以後」
〔…〕特異点の集合だけのような〔…〕ティルマンスの写真〔…〕あらかじめ整理されているものは全然信用していないんじゃないか。〔…〕フーコーだって今までの歴史はいっさい信用しなかった〔…〕
- コットン, C「3章　デッドパン」『現代写真論』晶文社、2010
- 前掲「磯崎新×篠山紀信　写真力と紀信力」
- 磯崎『「写真力」由来』、AC1212
〔…〕被写体は〈都市〉〔…〕文化そのもの〔…〕観者を「まきこむ」写真〔…〕もともとその場の只中で全身的な感覚によって感知されるのが都市である。
- 岡崎乾二郎「写真の存在する場所」『現代思想』2013.5臨時増刊
〔…〕東松照明はもちろんこのマージナルな場にこそ注目〔…〕表現することは逆説的にその決して一元化しえないものたちを繋げることで代表してしまう〔…〕建築家が都市というものを考えるときに同じような〔…〕都市に全体としての形態を与えることはできるか〔…〕という問題がある。
〔…〕一枚のイメージではなく〔…〕都市は膨大なデータの集積であり〔…〕現象として現れるイメージや形態として把握することも〔…〕できない。
- 磯崎、日埜、前掲「数々の写真家〔…〕」
〔…〕中平卓馬の撮った《群馬》は〔…〕実像と虚像が映りあう〔…〕山田脩二〔…〕変貌をはじめた日本都市の光景を〔…〕ディテールをとぼしたハイコントラストで〔…〕僕の東京論に欠かせない〔…〕
- 尾形一郎、尾形優『私たちの「東京の家」』羽鳥書店、2014
〔…〕記憶や出来事を投影できる建築特異地点を探し、写真に定着させ〔…〕その写真イメージをもとに〔…〕「東京の家」をつくる〔…〕今度は、つくった家のイメージから新たな撮影地点を探す。
- コールハース, R「レム・コールハースさん、20年前にARAKIが撮る東京に注目したのはなぜですか？」『SWITCH』2015.2
- 増田他、前掲「これからの建築写真の〔…〕」
〔…〕建築家は写真に対して「次の視点はどんなものだ、何が私たちを引っ張ってくれるのか」〔…〕
- 大澤紗蓉子「石内都と横浜」石内都『石内都　肌理と写真』求龍堂、2017
- 香山壽夫『建築のポートレート』LIXIL出版、2017
建築の前に立つ〔…〕見つめる〔…〕考えが浮かぶ。それでまた、見直す〔…〕少しでもしっかり見ようと、ファインダーを覗いた〔…〕折にふれ、何枚かを取りだす〔…〕取りだした写真を見直す。すると、またいろいろな考えが浮かんできて、さらに見直す〔…〕いつもなにか新しいものが立ち現れてくる。
- 「穴が開くほど見る」『住宅特集』2018.2–
- 今福龍太「家々は海深く消え去りぬ――多木浩二の〈反―建築写真〉」『原写真論』赤々舎、2021
- 甲斐義明「第9章〈もの〉のスナップ」『ありのままのイメージ』東京大学出版会、2021